

安藤 雅之 常葉大・教務部長



対面授業の再開方針を語る  
安藤雅之教務部長＝7日、  
静岡市駿河区の常葉大静岡  
草薙キャンパス

教育改革核心を問う

コロナ禍の授業の在り方について手探りの大学。国立に比べ運営の自由度が高いとされる私学はどう向き合ったのか。県内四つのキャンパスで8千人超の学生が学び、前期日程を終えた常葉大の安藤雅之教務部長に聞いた。

「新型コロナウイルスの影響をどう受け止めたか。」「遠隔(オンライン)授業などの対応は学則や文部科学省の通知に基づき、教授会でいち早く決定した。ただ、当大学はコロナ以前にオン

従来の授業 徐々に再開

ポイント

私立ならではの即断  
教育の質保証を優先  
支援金5万円を支給

ライン授業を全ての教員にお願いしてきた実績はなく、『授業は対面』という考え方にも疑問を持つていなかった。多くの教員や学生も不安を抱いたため、学内のウェブサイトの活用に慣れてもらう目的でオンライン授業全面開始の3週間前にガイダンス期間を設け、5月11日から

スタートした」

「オンライン授業で重視したことは、

『学生の学びと教育の質を保証する』という考え方。アンケートを実施すると、入学したばかりの1年生でパソコン端末のキーボードスキルを不安視したり、そもそも端末を持っていなかったりという事例があった。スマホ世代の特徴だろう。授業を円滑に進めるには最低限の

通信環境を整える必要がある。全学生に特別修学支援金という形で一律5万円を支給したのもそうした配慮だった。組織として即断で、私立ならではの対応になった」

「前期を終えて見えたことは、

「オンライン授業は学内のウェブサイトで講義資料を配信するなどし、課題やレポートを指示した。従来の対面授業はやや一方通行だったが、オンラインは個別質問に丁寧に向き合うことになり、むしろ学生に寄り添う形になった。ただ、資料作成など準備も含めて教員の負担が増えたのは事実。学生も課題に追われて手いっぱいになったケースがあった」

「大学はなぜ学内の全面再開に踏み込まないのか。」

「通学範囲が小中学校や高校と異なる点が決定的な理由。自宅生の多い当大学は浜松や伊豆地域から電車で通う学生がいる。学内で最善の予防に努めても、学外でリスクを伴う。学生側にも全面再開を望まない声が一部ある。後期は状況を見ながら徐々に本来のキャンパスの姿を取り戻したい。学部にもよるが、前期で従来の4割ほどだった対面授業を6割超まで再開する方針だ」